

葛飾北斎 『富嶽三十六景』「甲州三坂水面」における写実性について 宇山直子・高阪宏行

On the Realism of Landscape Woodblock Print “Lake Reflection Viewed from Misaka, Kai Province” in the Series of *Thirty-six Views of Mount Fuji* by Katsushika Hokusai Naoko UYAMA and Hiroyuki KOHSAKA

Abstract: This paper tries to count the number of landscape elements in the woodblock prints in the series of *Thirty-six Views of Mount Fuji* by Katsushika Hokusai. As the woodblock prints constructed by many landscape elements are thought to have a realism, one of them, “Lake Reflection Viewed from Misaka, Kai Province” is selected and inspected in terms of realism. By the comparison with the landscape reproduced using GIS, it becomes clear that the woodblock print is realistic in terms of the composition of landscape elements, but as they are arranged compactly it is unrealistic in terms of spatial arrangement of landscape elements.

Keywords: 景観 (landscape), 風景版画 (landscape woodblock prints), 葛飾北斎 (Katsushika Hokusai), 甲州三坂水面 (Lake Reflection Viewed from Misaka, Kai Province)

1. はじめに

近世後期の浮世絵界では、名所絵または風景画が多く制作されている。画家と鑑賞する人々の関心が、名所絵・浮世絵風景画のジャンルにおいて求められてきたからである。その中心人物である葛飾北斎（以下北斎）の『富嶽三十六景』（以下『三十六景』）は、後世の作品に多大な影響を与えた。北斎72歳のことである。これまでの近世絵画は、狩野派・土佐派などの御用絵師が主流となっていたが、一部の上流貴族や武家を対象としたものであった。北斎の長い画業の中の作品の一つである『三十六景』は、名所絵・風景画ということだけでは言い切れない。そこには遠近法の摂取により「実」を「奇」なる構図へと変化させ（岸、

1994），さらに北斎の日蓮宗の信仰心から富士塚と富士講への関心が向けられている（檜崎, 1944, 321-322）。

これまでの北斎研究の中心は、美術史の領域で蓄積してきた（鈴木, 1974；小林, 1983）。しかし歴史地理学では、名所図会の景観を捉える研究はあるが（矢守, 1984），風景画を一種の絵図と考えるならば、その研究は乏しい（長谷川, 2010；宇山, 2012）。本研究は、歴史地理学の絵図分析とGISを用いた景観の再現によって、風景画を客観的に分析することを試みる。

2. 『富嶽三十六景』における画面構成要素数の計測

構成要素とは、画面に描かれている事象であり（水本, 2002, 158-175），本研究では、地形・水部・自然・土地利用・建造物・道具・人物・動物の8項目に分けた。地形では、富士山をはじめ山・

宇山直子 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学大学院理工学研究科地理学専攻

Phone: 03-5317-9721

E-mail: naokohokusai@gmail.com

丘・島などが列挙される。水部では、海・湖・川があげられる。自然では、霧・雲・風など自然現象である。土地利用では、畑・樹木などがある。建造物では、集落・寺社仏閣・塚などがみられる。道具では、舟・駕籠などがあげられる。人物と動物は、画面に描写されている人々や牛馬などである。

46作品中、「凱風快晴」「山下白雨」「神奈川沖波裏」「諸人登山」は場所の特定が難しく、さらに、写実性が乏しいことから、画面の構成要素数の計測から除外した。表1は、残りの42作品に対して、画面構成要素と要素数をまとめ、要素数の多いもの順に上位を並べたものである。「相州江の島」が要素数13と最も多く、その写実性が高いと推測される。以下要素数10が7作品にみられた。これらの作品は、近景に注目し、その景観の特徴を細かく描写している。他方、少ない方では、要素数5が4作品、要素数4が2作品である。これらも近景を描いてはいるものの、より画

面を単純化し画面に絵画的特徴を表現している。例えば、「尾州不二見原」では、この時代に北斎をはじめとした浮世絵師が好んで用いた遠近法や、北斎独自の奇抜な構図が用いられており、写実性は乏しいと考えられる。

そこで本研究では、構成要素数が10と多く、さらに、逆さ富士に着目しそこから北斎という画家の個性がみられる作品である「甲州三坂水面」を研究対象としてとりあげ、写実性の程度を分析することを試みる。

3. 「甲州三坂水面」について

3.1 甲州旅行について

飯島（1893）によると，“文政8年頃、甲州方面へ行く”とあるが、定かではない。檜崎（1944, 326-327）は，“甲州方面の絵として「甲州三坂水面」・「身延川裏富士」・「甲州犬目峠」・「甲州伊沢暁」・「甲州石班沢」・「甲州三島越」の諸絵があり、天保6年版『富嶽百景 一篇』中にも「甲斐の不

表1 『富嶽三十六景』における画面構成要素と要素数（上位のみ示す）

作品名	要素数	構成要素
相州江の島	13	富士山、山、島、岩、砂嘴、海、樹木、旅籠、土産物屋、五重塔、石燈籠、舟、人物
甲州伊沢暁	10	富士山、山、土坡、川、川霧、樹木、道、宿場、橋、人物
深川万年橋下	10	富士山、川、中州、樹木、町、大名屋敷、火の見櫓、橋、舟、人物
甲州三坂水面	10	富士山、山、島、半島、湖、樹木、集落、妙法寺、舟、人物
東海道江尻田子の浦略図	10	富士山、山、砂浜、海、波、塩田、樹木、集落、舟、人物
身延川裏富士	10	富士山、山、岩、道、川、波、霧、樹木、人物、馬
従千住花街眺望ノ不二	10	富士山、山、日本堤、道、樹木、田、集落、茶屋、武器、人物
駿州大野新田	10	富士山、山、島、沼、葦、道、カヤ、人物、牛、白鷺

二濃男」などを描いているので、甲州へ行ったことは明らかである。甲州道祖神祭の幕は広重をはじめ多くの浮世絵師が描いたが、北斎の画があつたことが記録されている。”と指摘している。さらに北斎の“信州旅行に際しては甲州を通ったで

あろう思われる。”と述べている。また、甲州森林軒百貨店にある作から、北斎の複数の門人が描いたとされる絵があること、さらに、『富嶽百景』の「寫眞の不二」では画家が供を連れて富士山を写生するところを描いており、それが北斎の自画

像であると伝えていることを指摘している（檜崎 1944, 327-328）。このことから、北斎が実際に「甲州三坂水面」を観て描いた可能性が高いと推察できる。

3.2 「甲州三坂水面」の概要

御坂峠（三坂峠）は、甲府盆地と富士山麓との間にある鎌倉往還の峠である。本図は、峠を下り、

河口湖畔の桑崎付近から富士山を望む景観を描写していると想定した。中央左の湖上の島が「うの島」、その左側の建造物は「妙法寺」と考えられる。中央正面の集落は「勝山村」であり、その右手前には「富士御室浅間神社」が見える。右端の「足和田山」の麓の集落は「長浜村」である（山梨県立博物館, 2012）。



図1 甲州三坂水面とそれを構成する景観要素

出典：山梨県立博物館所蔵資料の「甲州三坂水面」より、景観要素名は著者加筆。

4. GISによる景観の再現

「甲州三坂水面」に描かれている景観をGIS上で再現するため、まず、国土交通省のHPから、10m メッシュの標高データをダウンロードし、GIS上で河口湖とその周辺の地形を表示した。図2は、河口湖北岸の桑崎付近から南岸の景観を3次元表示で再現したものである。

対岸は平地が広がり、「甲州三坂水面」に描かれているように、東西から山が迫っていないことが明らかになる。確かに、西方には足和田山が望

まれ、その山麓に長浜がある。また、東方には天上山や産屋ヶ崎が見られる。足和田山の形態と長浜の位置関係、さらに、天上山と産屋ヶ崎の二重の配置関係から、「甲州三坂水面」は、まさしく写実的である。しかし、それらの景観要素は、画角で見ると、中心の「勝山」からそれぞれ60度以上も離れていることが明らかになる。

北斎は、河口湖南岸の平地の広がる景観では飽き足らず、東西にある山々を画面の左右に転位させ、山国らしい雰囲気を出させたのである。「甲

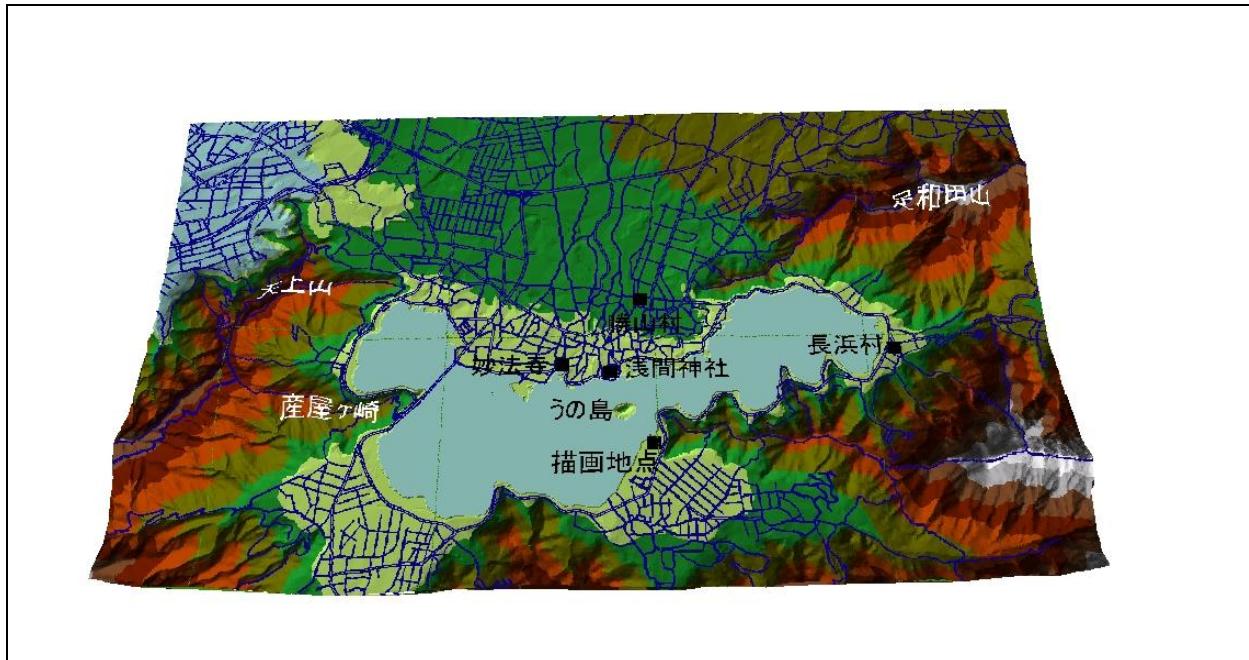


図2 10m メッシュ（標高）による河口湖の地形面の3次元表示と景観要素の分布

州三坂水面」で写実性がないのは、湖面上に映る富士山だけではないのである。

5. おわりに

本研究から、構成要素数が10と多い「甲州三坂水面」は、景観要素の構成の側面では写実性が高いものの、景観要素の配置関係は写実性が低く、周辺に見られる景観要素を転位させ、景観要素の配置関係をコンパクトにまとめていることが判明した。このことから、北斎は現地での景観の写生に基づき、「甲州三坂水面」を制作したものと考えられる。

謝辞

図版資料の使用で、山梨県立博物館にお世話になりました。紙面を借りて御礼申しあげます。

参考文献

- 飯島虚心（1893）：「葛飾北斎伝」、蓬枢閣刊。
宇山直子（2012）：「葛飾北斎『富嶽三十六景』に

みる空間定位と地域認識」、平成23年度専修大学大学院文学研究科修士論文。

岸 文和（1994）：「江戸の遠近法 - 浮絵の視覚 - 」勁草書房。

小林 忠（1983）：「江戸絵画史論」、瑠璃書房。
鈴木重三（1979）：「絵本と浮世絵：江戸出版文化の考察」、美術出版。

檜崎宗重（1944）：「北斎論」、アトリエ社。
長谷川獎悟（2010）：「都名所図会」にみる18世紀京都の名所空間とその表象、人文地理、62(4), 60-77。

水本邦彦（2002）：「絵図と景観の近世」、校倉書房。

山梨県立博物館（2012）：博物館資料のなかの「富士山」、
(http://www.museum.pref.yamanashi.jp/4th_fujisan/01fugaku/4th_fujisan_01fugaku36_29.htm)

矢守一彦（1984）：「古地図と風景」、筑摩書房。